

『われわれの小田実』

(藤原書店編集部・2800円十税)

『写真集ベトナム反戦闘争』

1965〜69

砂川

(砂川を記録する会・2300円)

天野 恵一

藤原書店編集部編の『われわれの小田実』は、2007年7月30日に亡くなった小田実の追悼論文集である。70人を超える個人(団体はフィリップンのグループからの2つのみ)の文章で成立している。個人個人の思いがこぼれている文章群である点、小田実の交流の流儀にかなっていると思う。国内の友人のみならず、国境を超えて広く、愛情のこもった文章(そこには「ただの人」とはいえない元韓大統領金大中あるいは、日本共産党の委員長志位和夫のものまである)が集まっている点に、この市民運動の巨人の生涯にわたる活動のダイナミックな軌跡が表現されているといえよう。「ベ平連」を軸としたベトナム反戦運動にとどまらず、実に多様な自分が直面したさまざまなマイナーな、そしてマスコミにも後押しされたメジャーな政治(社会)運動のテーマをも担いきった、日本には例外的な行動する知識人という像が、全体を通読すると、クッキリ浮かび上がってくる。もちろん小田は、なによりも大長編を書き続けた小説家であった(本人もそう自負していた)。しかし、その小説も平和主義者としての彼の活動の中から生まれたものであり、大量に書かれ続けた政治・社会時評群と小説は、かなりスト

レートに対応するものであることも、この追悼文集を通して、よく理解できる。ただ、そこにも、それなりに辛口の評価もある。

「強固な主張を譲らない活動家。独特の威圧感。その陰に、繊細で優しい小田実さんがいた」(宮田穂菜)、「彼はいきなり、不意に、怒った、怒り狂った。ごく普通のパネル討論会で、主として友人、彼に共感する人たち、彼のような有名作家に好奇心を持つ200人の聴衆の前に、彼は20分間にわたって怒鳴りまくった」(オイゲン・アイゼンホルン)。この人物は以下のごとき宇都宮徳馬の小田評も紹介している(小田さんは独裁者だが、平和のために働いているよ)。

ささやかに擦れ違う程度の交流しかなかった私には、そうであるしかなかったナーという思いと共に、こうした辛口批評の向こうがわに、威圧的にまくしたてる小田のなつかしいイメージが浮かび上がってくる。さて本書には2000年までは本人の手になるキチンとした年譜がついており著作の一覧もある。小田実研究のガイドブックとしては、すぐる便利な一冊であるのだ。

「砂川を記録する会」の『写真集ベトナム反戦闘争』1965〜69年 砂川』は、1955年、56年の滑走路拡張のための測量を実力で阻止した、あの「流血の砂川」ではなく(その時代の写真も少しあるが、もっぱら1960年代後半の、ベトナム反戦運動の時代の中の立川米軍基地拡張の反対運動の、写真を中心とするドキュメント集である(米軍を拡張断念に追い込むのは1968年12月)。

それはあらためて住民(農民)と支援の学生と労働者が連帯して闘った。その激しい実力闘争の生き生きとした記録(写真)がそこに収められている

(住民の生活をおびやかす、不気味な米軍機、そして米軍基地の姿も、リアルに実感できる)。また、そこには、アメリカの強制でくつがえされた砂川(伊達判決(違憲判決)という恐るべき事実をアメリカ側の資料から明らかにした、未浪清司や新原昭治の文章とともに、その資料自体も収められている。さらに、砂川闘争の体験を(原点)として生き続けている人々の力強い文章もそこにはそえられているのだ。2冊の本を通じて、私はあの60年代後半から70年代にかけてのベトナム反戦運動の時代が、それは私の運動のスタートの時代でもあるが、もはやまったくの過去の時間にくりこまれていてことを実感せざるをえなかった(もう、とっくにそうだったのだろうか)。過去を過去としてつきはなして対象化することを通して歴史的現在(今)とのつながりを検証する、運動史の作業こそが必要なのだろう。

そういえば、そうした作業に精力的に取り組んでいる道場親信が「難死」の思想と現代」という小田の核となる運動の思想史の広がりを『われわれの小田実』の方で書き、「砂川闘争」の方でも「第二次砂川闘争と新左翼のベトナム反戦闘争」において、この「三派全学連」と「反戦青年委員会」の支援闘争のいりくんだ時代を簡潔にわかりやすくまとめている。

ただ、小田解説文の中の、吉本隆明と三島由紀夫を、江藤淳とならべて「戦中派」と同世代として一括りにしたり、高橋和巳の小説『散華』を三島の散華(右翼)思想と同列にならべて論評したりという、なんともいえない杜撰さは、どういうわけだ(ダイナシだよ)。それでも私はこの二冊を強く推薦します。

(あまの・やすかず/本誌編集委員)

